

現在12人の卒業生らが教育実習に励んでいます

H21年6月

県立伊丹北高等学校長

木佐貴正博

5月28日から6月19日まで、本校卒業生ら12人が、教育実習に来ています。実習にあたってのオリエンテーションで、私から彼らに下記の4つの質問をしました。

Q1：学習への効果は、ほめた方が良いか、叱った方が良いか？

Q2：学習への動機付けをどのように図るか？

Q3：大胆に幹を教えるか、厳密に枝葉を教えるか？

Q4：何が基礎・基本と思うか？

(ご自分の教科に即して)それを定着させるための方策は？

彼らの回答を実習生のDさんがまとめてくれました。各Qに私のコメントを付して、彼らにフィードバックしました。それをアクセスいただいた皆様にも紹介しておきます。

回答からうかがえるように、実習生はいずれも意欲にあふれた卒業生です。本校で学んだことを基礎に教職の道に進んでくれることを期待しています。

*

教育実習の皆さんへ

教育実習の皆さん、私からの宿題の回答をDさんがまとめてくれました。Qの最初に私のコメントも付していますので、参考にしてください。

Q1 学習への効果は、ほめた方が良いか、叱った方が良いか？

○一般には的確にほめた方が、学習者の意欲を高めるでしょう。特に自信が持てないとき、他者からほめられると安心し、力づけられるものです。そして学習者は自信のないことが通常でしょうから、ほめることの方が有効でしょう。ただ、学力に自信がある生徒には叱ることも有効であるとの研究もあるようです。いずれにしても大切なことは、いかに意欲を高めるかということです。日々ご研鑽、意欲を刺激するよう努めてください。(K)

T.A.さんの意見

ほめた方が良い。生徒のやる気を引き出し、自信をつけさせることができるため、学習意欲が高まると思う。

T.D.さんの意見

私は、叱るよりもほめる方が学習の効果はあると思います。

「できないから叱る」のではなく、「できることをほめる」というスタンスで生徒に接することが大切だと思います。

なぜなら、叱ることにより、生徒がその科目や、自分自身に対してマイナスのイメージを持ってしまうと、生徒の勉強に対する意欲そのものが失われてしまう可能性があるからです。

逆に、小さなことでも何か生徒ができることを見つけて、そこをほめて伸ばすことにより、様々なことに対して意欲を持てるようになるのではないのでしょうか。勉強に対して意欲を持ってない生徒にも、「勉強しなさい」と叱るのではなく、学習とは違った面（部活など）からのアプローチにより、少しずつ学習意欲を持たせることができるのではないかと思います。

H.K.さんの意見

もちろんほめることにも叱ることにもそれぞれに意味と目的があり、case ごとに最も適したものを使い分けなければならない。例えば、単語テストをすると伝えていたのに生徒が勉強をしてこなかったなら、それは叱るべきであるし、勉強を一生懸命したけれどよい点数が取れなかったという生徒には、まずは少なくともちゃんと正解した回答があったということをはめた上で、勉強の仕方などの相談をし、指導する必要がある。

ほめるべきか叱るべきかを正しく判断すれば、どちらも学習への効果がある。しかしほめるべきところは見落としやすく、見つけることが難しい。そしてほめるべきときにほめることができなかった時には、学習への効果が落ちてしまうのではないだろうか。そういった点で、ほめるということに少し気をつけることが大切である。

R.D.さんの意見

ほめる方が学習への効果は高いと思う。しかし、大切な点は「ほめる」と「おだてる」の区別をすることだと思う。

「おだてる」は「本人が喜ぶことを言うこと」であり、必ずしも本人に良い影響を与えとは限らない。極端な例では本人が努力をしていない時に本人が喜ぶことを言うと、努力をしなくても良い、と本人が思ってしまう可能性もある。このような場合には毅然と注意することも必要である。

一方で「ほめる」時に大切なことは、「本人の努力をほめてあげること」であると思う。生徒は自分の努力が認められると嬉しく感じると思うし、逆に努力をしたのに教師に気づいてもらえないと寂しく感じ、モチベーションが下がることもあると思う。教師は、生徒の小さな努力でも見逃さずに常日頃から注意する姿勢が大切だと思う。

H.I.さんの意見

ほめることで生徒の気持ちを前向きにし、意欲を掻き立てることができると思います。

学習は誰かに促されて行うよりも自分から進んで行う方が、その機会は増加し集中度も向上するため効果は上がります。しかし、生徒の個性をきちんと見極めることが重要だと思います。あまりほめすぎると、自意識過剰になり学習を怠けるおそれのある生徒もいるでしょう。反対に、強く叱っても負けん気をもって自分にムチを打ち学習に意欲的に取り組み、その効果を上げる生徒もいると思います。

したがって、基本的にはほめるが、臨機応変に対応するべきだというのが私の意見です。

M.M.さんの意見

学習に関しては、ほめる方が効果をあげられると思います。

ほめられて嫌な気分になる人はいないはずですが、ほめられたらまたがんばろうという気持ちが沸いてくると思います。

学習によってほめられれば、さらに上の段階の学習をしようとする気持ちが生まれ、学習の輪を広げていけると思います。

N.T.さんの意見

ほめた方が良いと思います。ほめることで、もっと頑張ろうと思ってもらえたり、周りの子もそれを見て、自分も頑張ろうと思う子がいると思うからです。叱る方が伸びる子もいると思いますが、学習にマイナスイメージをあまり持ってもらいたくないので、基本は褒めるスタンスで臨んだ方がよいと考えます。

H.O.さんの意見

私はほめた方がよいと考えます。なぜなら、ある一定の効果に対して、しっかりと見ていることを生徒に示すことができるからです。また、その都度ほめた方が、ある種の達成感が得られ、次のステップへと発展すると考えるからです。もちろん、生徒一人ひとりのタイプや達成感の大小は異なりますが、ほめられて嫌な気持ちになる生徒はいないのではないのでしょうか。このような小さな達成感の積み重ねから、何か明確な目標が見えてくる生徒もいると私は考えます。

T.Y.さんの意見

一概には言えませんが「ほめた方がよい」と思います。

生徒の個性にもよりますが、叱られて自分自身の欠点ばかりが見えている状態では、意欲が湧かずに余計学習が滞ると思います。

その点「ほめる」という行為は意欲を喚起できる可能性が高く、効果的だと思います。

だからと言ってほめているだけでも効果はないと思います。肯定ばかりされると、現状に満足し、努力を怠る生徒もいるからです。

大切なのは次につながるような意欲を持たせること。そのためには褒める事が必要だと思いますし、また「叱る」とまではいかななくても指摘したり、アドバイスをしたりしていくことが必要だと思います。

M.I.さんの意見

私は褒めた方がよいと考えます。

しかし、ただ褒めればよいのではなく、生徒の成長を具体的に褒めることが効果的だと考えます。

それにより、生徒も自らの成長を知ることができ、また自分の努力を認めてもらえたと感じられるのではないのでしょうか。

M.Nk.さんの意見

学習への効果は、ほめたほうが良い。

人それぞれ感じ方や考え方は違うが、誰だってしかられるといい気分はしない。叱られる事によって、その教科が嫌いになったり、苦手意識が生まれるかもしれない。一度そのようになってしまうと、なかなか気持ちを取り返せないと思う。

ほめたら調子によって何もやらなくなる生徒がいるのでは、と指摘を受けるかもしれない。

しかし、その時に叱るのではなく、生徒自らがやる気になる様な声掛けや授業を試みることが大切だと思う。

M.Ng.さんの意見

褒めるのか叱るのか、どちらがいいかは言い切れない。例えば普段からただ叱っているだけの教師に何を言われても、生徒のやる気は起こらない。毎回毎回叱っているだけの教師は、生徒のやる気を起こさせるどころか、ただ反感を持たせるだけで終わってしまう。いくら生徒に対して熱い想いや愛情を持っていても、叱るのみでは生徒に想いは届かない。しかし逆に、普段から生徒に対して愛情を表し、信頼されている教師が叱った言葉は、生徒の心に響く。生徒はなぜ叱られてしまったのかと考え、反省する。教師は、まずは生徒のほんの小さな成長でも見逃さないようにし、気づいた時には必ず褒め、「ああこの先生は私のことをよく見ている」と生徒から信頼を得ることが大切だと思う。その信頼関係が成り立ってこそ、叱ることによる効果が出てくると思うからだ。

Q2 学習への動機付けをどのように図るか？

授業ですべてを教えきることは出来ません。だからこそ一層学習への動機付けが望まれます。皆さんの学習の仕方、ノウハウを教えたり、学問への姿勢や簡単なエピソードを示したり、自分ならではの動機付けを工夫していただきたいものです。

かつて、数学者ガロアの話をして、小伝記をコピーして渡したところ、俄然やる気をおこして頑張った理系の生徒がいました。トピックの紹介や人物紹介は人の動機付けには効果的だと思っています。(K)

T.A. (数学)さんの意見

生徒にとっておもしろい、楽しい、わかりやすい授業を心がける。生徒にわかる喜びを持たせたい。

T.D. (理科：化学)さんの意見

化学の場合、実際には見えないもの（分子など）を上手く自分の中でイメージできるかどうかによって、理解できるかどうかが左右されるので、動機付けには、視覚的なものや、触覚的なものが良いと思います。

例えば、分子の構造を説明する時には、平面的な図だけではなく、分子模型などを使えば、すぐに、立体的なイメージができると思います。

このように、教科書などに載っている図や写真だけで考えるのではなく、実際に自分の手を使って考えることが、理解や、興味につながると思います。

H.K. (英語) さんの意見

自分はどういうときに勉強が楽しいと思えるだろうか、と考えると、それはやはり「わかった！」という喜びがあるときだと思う。当たり前なことではあるが、わかりやすい授業をすることが何よりも大切であるし、さらに「わかった！」という実感、「問題が解けた」という自身を持たせる工夫が大切であるように思う

例えば I have a pencil. という文章を「進行形にできますか？」と尋ねるときに、直接それを尋ねるのではなく事前に「　　さん、have は状態動詞ですか？動作を表す動詞ですか？」と発問してから、「よし、状態動詞ですね。じゃあこの文章は進行形にできますか？」と聞き、「あ、それじゃあ進行形にできません！」と生徒が答えられたならば、「わかった！」という喜びがうまれる。そのように、学習への動機付けには少し工夫が必要であるように思う。

R.D. (英語) さんの意見

学習したことがどのような結果を生むか、を伝えることが大切だと思う。例えば、英語であれば「受験が必要である」、「外国人とコミュニケーションがとれる」、「将来的に英会話は必要なスキルである」などを自身や様々な人の体験を交えながら話すことが英語学習へのモチベーションをあげる一つの方法であると思う。

H.I. (保健体育) さんの意見

学習は楽しいと生徒に思わせることが一番の動機付けだと思います。そのためには、教師が展開する授業が楽しいものでなければなりません。楽しい授業とはどのようなものかと考えると、明るく温かい雰囲気で行われ、学習目標に向けてテンポ良く勢いがあり、教材が工夫されており、何より生徒の力を確実に伸ばしている授業だと思います。

このような授業をするために教師が努力すれば、生徒にもその気持ちが伝わります。そして、学習意欲の発起や学習動機となると私は考えています。

M.M. (国語) さんの意見

学習者に興味を持ってもらうことが、動機付けの基本だと思います。そのため、初めに自分たちの日常に密着したことを取り上げたり、いろいろな角度から、その学習をすることで得られるものを伝えたりすると思います。

N.T. (英語) さんの意見

言語は、「わからないけど理解したい」と思うことで学習意欲が高まると思っています。映画や音楽、スポーツ選手のインタビューなど、興味のある題材を使えば、やる気が高まると思っています。特に英語は、コミュニケーションのツールであるので、実際に使える（わかる・伝わる）喜びを体感してもらえれば、学習に効果がでると思っています。

H.O. (地歴)さんの意見

学習への動機付けを行うには、まずは、学習問題が生徒の生活や身近なところと何らかの関りや興味・探究心に沿っている必要があると考えます。そのためにも本時の目標は具体的に明示する必要があると考えます。

T.Y. (美術)さんの意見

とにかく魅力的な題材を提供していく事が大切だと思います。

美術との将来的な関わり方は人それぞれでいいと思います。強制されて取り組むものではないし、「何のために」学習するかという点を言語化して教えても、ほとんどの生徒はなかなかピンとこないのではないかと思います。

ですので、経験（制作・鑑賞）の中で「楽しい」と思え、自然と動機付けできるようにしたいと思います。「自然と」という部分が難しいならば、まずは「表現したもの」を自分の中で設定・整理させます。答えのない美術の世界で、あえて自分の中に答えを作り、取り組む事で、自然と表現する事の意味や理想が見えてくるのではないかと思います。

M.I. (美術)さんの意見

生徒の身近にあるものは比較的興味関心が高いと考えられるので、そこから学習を導入することで動機付けを図りたいと思います。

また、日常の疑問や時事問題、流行なども効果的だと考えます。

M.Nk. (書道)さんの意見

まず、生徒が「楽しいな」と思えるような授業をすることが一番大切だと思う。授業の内容、そして教師の脱線した話を含めて、生徒が教師の話している事を聞きたいと感じるような授業にしたい。

授業の中身としては、導入の部分でどれだけ生徒の心を掴めるか、興味を引くかが勝負ではないかを感じる。

M.Ng. (音楽)さんの意見

まず生徒それぞれが、どんな動機で学習に向かっているのかを把握することが必要だと思う。友達との競争心からなのか、その教科に本当に興味があるからなのか、受験のためなのか。そして「友達が頑張っているから自分も頑張ろう」「この科目は先生がおもしろいから楽しみだ」などきっかけは何でも良いので、とりあえず学習する姿勢を作り出さなければならない。そして生徒に「学習したい」と思わせるためには、教師自身が自分の人間性を磨き、いかにその教科が面白いのか、魅力があるのかということ、常に情熱を持って生徒の興味をそそるように伝えていくことが大切だと思う。

Q3 大胆に幹を教えるか、厳密に枝葉を教えるか？

○国語などにおいては、文章の一部を抜いて詳読することは避けられないことと思いますが、それとて、文全体の幹の部分の解説があれば理解は深まるものと思います。

私は数学ですが、大胆に幹を教えてきて、生徒には分かりやすい授業だと評価してもらっていたように思っています。過度に良心的に、学者的な厳密さで授業をすれば分かるものまで分からなくなるでしょう。難しく教えて悦に入るような授業もないわけではないでしょうが、通常は自信のない内容ほど難しい授業になりがちです。消化しきって、難しいことをいかに易しくエッセンスを伝えるかが教師の力量だとおもいます。(K)

T.A. さんの意見

幹を教える。授業でも生活でも、教師が幹を教え、育てる。それを基本として生徒自身が枝葉をつける。

T.D. さんの意見

私は、大胆に幹を教えるべきだと考えます。授業では細かい内容や複雑な問題に時間を費やすよりも、基本的な知識の定着に時間を使うほうが有効であると思います。

基礎が定着しておれば、その基礎の延長にある応用力や、細かな知識は、家庭学習でも十分身につけることができます。

H.K. さんの意見

授業では、大胆に幹を教えるべきである。なぜなら、ひとつの授業にあれもこれもと欲張ってしまっただけではいけないと思うからだ。本時の授業での「最も大事なポイント」および「抑えておきたい重要ポイント」を正しく絞って、それを明示することが大切である。そうすることで授業にメリハリがでるし、生徒もどこを覚えるべきか、理解するべきかを捕らえることができる。枝葉は、幹が隠れない範囲で、必要なものを少しだけ付け足していくものだと思う。

R.D. さんの意見

まず初めに大枠（幹）を教え、それが理解できた後に細部（枝葉）を教えることが一つの方法であると思う。英文法の「文型」を例にとると、初めから各文型の特徴を細かく説明しすぎるのではなく、おおまかな特徴を教えてそれが理解できたのちに更に細かい特徴を教えていくべきだと思う。

H.I. さんの意見

現在の学校における学習時間を考えると、各教科において細かいところまで教えることは大変厳しいことだと思います。よって、確実に理解させておかなければならない主要な部分を大胆に教える方が良いでしょう。また、細かい部分は、生徒各々が興味を持った分野や、今後の進路に必要な分野において自身で探求していく方が、教わる以上の学習効果

をもたらすと思います。教師はすべてを教えるのではなく、生徒が自分自身で成長するための流れの部分である根幹を教えることが良いと私は考えています。

M.M. さんの意見

私の専門は、国語ですが、国語という教科は、答えがないとよく言われます。確かに、国語を教える目的は、話す、聞く、読む、書く、といった能力を育てることで、一人ひとり答えがちがっていいものだと思います。厳密に教えるというのは、教える側の主観を押し付けてしまいかねると思います。その学習者一人ひとりの感じ方、考え方を大切にしていけるような教え方が理想です。

ただ、文法、語義、漢字や敬語など決まりのあるものは、厳密さも求めていかなければ言語能力を育てることができないと思います。

学習の内容や学習者のニーズによって、教授法を選択していく必要があると思います。

N.T. さんの意見

大胆に幹を教えるべきだと思います。厳密に枝葉を教えていては、まとまらず、きりが無いと思うからです。授業時間内で枝葉を完全に詰めることは、不可能だと思います。幹となる基本がしっかりしていれば、例外などの枝葉は出会った度に教えることですむと思います。細かく時間を割いて教えるよりは、おおざっぱでも、何度も何度も反復して教える方が効率がよいと思います。

H.O. さんの意見

私は大胆に幹を教えるべきだと考えます。理由は大きく2つあります。1つ目の理由は、生徒の学習を組織するという観点で、授業を構成しているからです。基礎・基本の徹底ないし、理解なしにはうまく機能しません。生徒が様々な形で活動や反応することで、段階を踏んで知識として定着していくと考えるからです。2つ目の理由は、時間的・質的問題ですべてを扱うことに対して、困難性があるからです。

T.Y. さんの意見

美術では大胆に幹を教えたいと思います。

美術における幹は、技法・発想だと思います。「自由に表現する」事が必要と言われる美術分野ですが、限られた方法でしか表現出来ない状態では「自由」とは言えません。

そのため、教師側は題材を通して新しい技法や発想を生徒に教えていく必要があると思います。1つ1つを定着させるというより、少しでも多くの事を学んでもらい、その中から生徒が研究したい方法を自主的に選択できることが大切だと思います。

M.I さんの意見.

幹がないと枝葉は生えません。

まずは基礎となるものがしっかりしていないとなにも定着しないと思います。幹を教えしっかり太くしたところで、必要な枝葉を精選して教えることが望ましいと考えます。

M.Nk さんの意見.

まずは大胆に幹を教えることが大切だと思う。枝葉ばかり教えても流れがつかめず解る

ものも解らなくなる。最初に土台となる幹を教えて、その上で枝葉を積み重ねながら授業をすることが、生徒にとって一番わかりやすい授業なのではないかと思う。

M.Ng. さんの意見

大胆に幹を教えるべきだと思う。クラスにはその科目に対しての興味、関心が高い生徒もいれば、低い生徒もいる。最初から枝葉まで細かく教えてしまうと、興味、関心が低い生徒を飽きさせてしまうことになる。そうではなくて、まずは、その科目に興味を持たせるような内容を大まかにざっと教えることが大切だと思う。隅々まで話してしまわずに、何か課題や疑問点を残すことによって、「なぜなんだろう？」という興味を常に持てるようにする。そうすることによって、その疑問点を解決したいという学習意欲が湧くからだ。

Q4 何が基礎・基本と思うか？(ご自分の教科に即して)

それを定着させるための方策は

○数学でいうと、完成されたものは美しいのですが、足場を取っ払っているため、考え方のプロセスが見えない。むしろどのように完成されたかの具体的な道具やプロセスを示す方が分かりやすい。どのように考えるかの、考え方そのものが基礎・基本だと思うので、解き方にしても、思考のプロセスを示しながら解いていく方が理解が深まり、定着すると思います。

また、数学のような論理的な学問でも、記憶力は学力の大きな要素であることは強調してもよいと思います。基本的な考え方は理解して覚える、覚えて使いこなすことで理解は一層深まります。記憶力の効用はキッチリ説くべきでしょう。(K)

T.A. (数学) さんの意見

論理的な思考を養うための技術、能力。方策としては徹底した反復。

T.D. (理科：化学) さんの意見

理科で基礎となるものは、何事にも興味を持つことだと私は考えます。とても曖昧な表現ではありますが、私はこれが理科の学習にとって最も重要な原動力であると思います。

難しい内容でも、興味を持って自分なりに考え、答えを出す、結果それが間違いだとしても、その過程は必ず次につながります。これを定着させるためには、教科書だけでなく、インターネット、テレビ、新聞などを用いて、理科に関する情報を生徒に提供し、生活のあらゆるところに、理科が係わっていることを伝えなければならないと思います。

R.D. (英語) さんの意見

英語の基礎・基本は「単語力」と「文法力」であると思う。単語力の定着のためには単語帳などを用いてとにかく単語に触れる時間を増やすことであるが、分かっている一人ではなかなか学習が進まないかもしれない。週に一回小テストを実施するなどして、単語学習の目標を明確にすることが大切だと思う。

「文法力」の定着に関しては、授業で習った文法範囲を復習することが大切だと思う。市販の文法テキストを3回繰り返してやれば大学入試レベルの文法はマスターできると思う。文法力をつけるにはとにかく多くの問題に触れることが大切であると思う。

H.K. (英語) さんの意見

英語に関しては、文型と品詞を理解することが何よりも大切であろう。学習の動機付け・やる気が起きるために最も大切なことは「わかる」ということであり、そしてわかるとは「分ける」ということである。英語について理解を深めるときには、まず文章構造を文型や品詞レベルまで「分けて」理解できる力を身につけることが大切である。文型と品詞を理解するためには、「生徒自身が自分で分けてみる」という機会を数多く与えるべきであろう。自分で分ける作業を繰り返さなければ、英文の構造を把握することはなかなか難しい。機会を与えなければ「なんとなく単語の意味から文章の意味はわかったから、それでいいや」と楽な方に流れやすいので、そうならないように注意しなければならない。

H.I. (保健体育) さんの意見

保健体育の目標として、健康・安全や運動についての理解や運動に親しむ資質や能力の育成、体力の向上や明るく豊かで活力ある生活を営む態度の育成などがあげられます。その最も重要な部分が心身の健康です。この基礎が崩れていれば生活やスポーツ活動において良い調子やパフォーマンス、結果を得ることはできません。すべての活動の流れを作っているといってもおかしくないでしょう。

この基礎を定着させることは簡単そうで大変難しいと思います。方法は分かっているにもかかわらず実行できないからです。それは、食事・睡眠・運動などのバランスの取れた規則正しい生活を日々送ることです。また、趣味や生きがいを持ち、ストレスを最小限に抑えることも重要です。

心と身体は深く関わっています。最初からどちらとも健康にすることは大変です。しかし、どちらかを気にして健康に保っていれば、もう一方も自ずと健康に保てると私は考えています。したがって、難しいことではありますが、まずは規則正しい生活を送ることが保健体育の基礎である心身の健康を定着させる方策であると思います。

M.M. (国語) さんの意見

学習の基礎・基本は、興味を持つことだと思います。理想は学習者自ら興味を持ち、学習したいと思うことですが、それでは幅の狭いものになりやすいでしょう。そこで、教師はこんなことやあんなこともあるというように例を示し、興味の幅を広げることによって、学習を定着させることになると思います。

私の専門の国語で言えば、基礎・基本は、日常のコミュニケーションだと思います。国語力は、一人で生きていけない以上不可欠なものです。コミュニケーションをさらにとるには、国語の学習をしていくことが必要になります。国語は積み上げていくことが大切だ

と思います。定着をさせるには、積極的にコミュニケーションをとれる場所をつくることだと思います。

N.T. (英語) さんの意見

やはり文法(構造)・語彙でしょうか。この基礎基本がある程度なっていないと、理解できないはずだからです。定着させるためには、反復学習しかないと思います。慣れてくれば、法則が見えてきたり、予測できるようになると思うので、繰り返し、繰り返し使うことが大切だと思います。

H.O. (地歴) さんの意見

この問いに対しては、まずは、しっかりとした生徒観の構築と社会、一般的に理解しておいてもらいたい内容の精選が必要不可欠だと考えます。特に、地歴は暗記系科目ととらえられがちなので、しっかりとしたタテ・ヨコのつながり、人々の営みと思想など諸事象をリンクさせながら、定着する必要があると考えます。そのためにも、視覚的アプローチや逸話や伝記などによる興味・関心の増進も必要であるとも考えます。

T.Y. (美術) さんの意見

抽象的ですが、美術における基本は「制作を楽しめる気持ち」だと思います。この気持ちがなくなれば、制作すること自体が困難になると思うからです。これを定着させるためには、やはり生徒1人1人の個性を尊重した指導をする事が必要になると思います。技術的な良し悪しはあるにしろ、美術は答えのない分野なので、否定することより生徒各々の良い点を認め、伸ばすように心がけたいです。そうすることで、自然と自分の良さを知り「楽しい」という感情が生まれるのではないかと思います。

M.I. (美術) さんの意見

自分の教科に即して考えると、基礎基本は道具の扱いや、制作に対する意欲だと考えます。その基礎基本を定着させるには、魅力的な題材を教師が用意することであると思います。あとはとても基本的なことですが、繰り返し行うことが定着させる上で必要なことだと考えます。

M.Nk. (書道) さんの意見

ただ単に文字を整えて書くのでは、書写と同じである。ただ書くだけではなくて、筆に自分の想いを託して文字の造形によって個性や創造を表現することが、書道の基礎・基本だと思う。

それを定着させるためには、様々な古筆を学び、その古筆が持つ特徴や私たちに与える印象やその理由をその都度考えさせ、それを表現できるように毎回の授業で練習をつむことが必要である。書道は他の教科と違い次回までの宿題はほとんどない。よって授業の中でいかに筆を持つ時間を増やすか、生徒たちに表現技法を獲得させるかが勝負だと思う。

古筆を学習し、それを活かして自己表現できるようになることが大きな目標である。

M.Ng. (音楽) さんの意見

音楽は他教科と違い、体と心を使って自分自身を表現する教科である。表現するための

基礎・基本として最低限必要なのは、楽譜を確実に読む力である。そのためには、まず何より音楽を好きになり、楽しむこと。「あのアーティストの曲が弾きたい」「あの歌手みたいに歌ってみたい」「あのお店で流れている BGM は何だろう？」など、きっかけは何でも構わない。楽譜には曲の様々なヒントが隠されている。楽譜を読めるようになるには、その曲をもっと理解したい、表現したいという気持ちを常に持ち続けることが大切だ。